

災害と文化遺産

台風19号では大雨による河川の氾濫で、市内は大きな被害を受けました。地震や洪水といった災害は歴史的にも繰り返し襲ってきましたが、台風19号の爪跡もまた大きなものでした。今回の台風では、次のような歴史ある建造物の被害も確認されています。

◇旧山方町役場下小川支所

文書館だより vol.12「明治の合併後の下小川村」(『広報常陸大宮』平成28年9月号)に掲載した、旧山方町役場下小川支所の建物は、久慈川の増水のため床上浸水の被害を受けました。

明治22年の町村制で誕生した下小川村は、家と楽、久隆、西金、盛金地区が合併した村で、役場は西金に置かれていました。その後、昭和30年に山方村・野上村・諸富野村・下小川村の一部が合併して山方町が誕生すると、旧下小川村域の支所として数年の間設置され、閉所後は個人が管理していました。平屋建てで屋根は瓦葺き、モダンな戸袋のデザインが目を引きま



▲被災した旧下小川支所の建物(盛金地区)

旧下小川支所の周辺では、増水した久慈川が下小川橋を一部で超えたため、周辺の家屋が浸水する甚大な被害がありました。増水によって被災家屋の周辺には建物の一部や資材などの巨大な瓦礫が流れてきました。水流の強さを物語るものです。

◇幕末の名士・旧今瀬家住宅

水戸と宇都宮を結ぶ茂木宇都宮街道の途上にあり、江戸時代から明治時代にかけて、那珂川水運により野田村で河岸を営んでいた今瀬家。江戸時代後半の当主兵三郎のときに今瀬家は大きく成長しました。その後、幕末から明治にかけての当主仲之丞は、村の庄屋を務め、水戸藩の志士たちとも近く、近郷でも知られた地方の名士でした。

水戸藩9代藩主徳川斉昭は光圀に次いで領内巡視を行いました、その途次で今瀬家に滞在したと伝

えられています。今瀬家ではこの日のために母家に「新二階」と呼ばれる附属棟を増築。新二階へは那珂川の支流綱川から直接、舟を藩主通用のための出入口に着けることができました。

その後、明治時代の今瀬家の当主で医師の今瀬長が洋館風の病院を建築します。2階建ての洋風建築は、河岸経営で外の地域とのつながりが強かった野田という地区の地域性の表れかもしれません。



▲斉昭も訪れた今瀬家(野田地区)



▲洋館造りの旧今瀬医院

台風19号により今瀬家住宅は約3mの高さまで浸水し、2階まで水に浸かりました。

住民の方によれば、野田地区の那珂川に面したこの地域は、増水で度々浸水を経験してきたそうですが、今回のような大規模な浸水は初めてとのこと

です。これらの歴史ある建物は、文化財に指定されてはいませんが、市の歴史を物語る貴重な遺産です。

今後も増加することが予想される大規模災害に対して、私たちの地域の宝である歴史や文化をもった資料や史跡、モノや習俗などが失われることがないよう、その普及と保全に努めていきたいと思

※いずれも個人の所有地ですので敷地への立ち入りはご遠慮下さい。

■問い合わせ■ 文書館 ☎52-0571